

靈主体従

前項に説いた如き、無機質界と人間の病氣との関係であるが、無機質界とは吾々の唱へる靈界であつて、此靈界と人間との関係はどういう事になっているかというと、抑々人間とは体と靈との二原素の密接合致によって成立っているものであつて、勿論体とは眼に見ゆる物質で誰にも判るが、靈とは眼に映らないものである以上、長い間分らなかつたのである。処が確實に存在している一種のエーテルの如きものである。としたら方法によっては、把握出来ない筈はないのである。というのは人間の肉体が空気中にある

と同様の意味で、人間の霊と雖も霊界中にあるからである。霊界とは曩にもかいた如く、空気とは比較にならない程の稀薄な透明体であつて、今日迄無とされていたのも無理はなかつたのである。然し此世界こそ無処ではなく、寧ろ万有の本源であつて、絶対無限の力を蔵しておるもので、一切は此力によって生成し化育されているのである。そうして霊界の本質は太陽の精と月の精と土の精との融合一致、想像を絶する程の、霊妙不可思議な世界である。処が茲で問題であるのは、人間が各々其役目を果す上には肉体に垢が溜る如く、霊には曇りが溜積するのである。従つ

て之に対し自然浄化作用なるものが発生し浄められる。之も恰度人体に溜った垢が、入浴によって清められるようなものである。処が右は独り人間ばかりではなく、天地間一切のものがそうである。例えば此地上靈界に汚穢が溜るや、自然作用によって一定の個所に集中され、低気圧という浄化活動が發つて清掃される。暴風も出水も洪水も又雷火も人的火災もそれである。と同様人間にも浄化作用が發生する。今其理由を詳しくかいてみよう。

右の如く、人靈に溜った汚穢は一種の曇りであつて、此曇とは本来透明体であるべき人靈に、不透明体の部分が出

来るそれである。然し乍ら此曇りの原因には二種類ある。

一は靈自体に発生するものと、二は逆に体から靈に移写されるものである。先ず前者から説いてみるが、元來人靈の内容は經に言えば求心的三段階に、緯に言えば求心的三重層になっている。つまり・の形と思えばいい。勿論丸の中心が魂であって、魂とは人間が此世に生れる場合、自然法則によって、男性から女性の腹へ宿らせる。本來魂なるものは極微のポチであって、勿論各々の個性を有っており生命のある限り人間に対して絶対支配權を有っている事は、誰でも知っている通りであるが、其魂を擁護的に包ん

でいるものが心であり、心を包んでいるものが霊であつて、霊は全身的に充実しているから、人体と同様の形である。此様に霊体は一致している以上、魂の如何は其儘心を通じて霊に反映すると共に、霊のそれも心を通じて魂に反映するのである。斯くの如く魂と心と霊とは大中小、小中大の相互関係で、言わば三位一体である。処が如何なる人間と雖も、生きている間善も行えば悪も行うので、その際善よりも悪が多ければ多いだけが罪穢となつて魂を曇らすので、其曇りが心を曇らせ、次で霊を曇らすのである。そうして、其曇りが溜つて一定量を越ゆるや自然に浄化作用

が発生し、曇りの溶解排除が行はれる。然しそうなる迄の過程として曇りは漸次一ヶ所又は数ヶ所に分散し、濃度化すると共に容積も縮少され固結される。面白い事には其罪によつて固結場所が異う、例えば目の罪は目に、頭の罪は頭に、胸の罪は胸にというように相応するものである。

次に後者を解いてみるが、之は前者と反対で、体から靈に映るのであるが、其場合最初血液の方に濁りが生ずる。即ち濁血である。すると靈にも其通りに映つて曇りとなるが、之も前者と同様局所的に分散濃度化するのである。元來人体なるものは靈の物質化したものが血液であり、反対

に血液の靈化が靈であるから、つまり靈と体は同様といつてもよいが、只靈体の法則上靈の方が主になっており、体の方が従となっているのである。処が何れにせよ右の原因によって、毒素は絶へず人体に溜り固結となるので、其固結が浄化作用によって溶解され、液体となって身体各所から排除されようとする。其為の苦痛が病氣なのである。

右に述べた如く、体に発生する濁血とは何であるかというに、之こそ実に意外千万にも医療の王座を占めている処の彼の薬剤であるのである。というのは本来薬というものは此世の中には一つもない。現在薬とされているものは悉

く毒であつて、其毒を体内に入れるとしたら、それによつて濁血が作られるのは当然である。何よりも事実がよく証明している。それは病氣が医療を受け乍ら長引いたり悪化したり、余病が發るといふ事は、薬毒によつて病氣が作られるからである。

従つて薬毒で出来た濁血が、靈へ映つて曇りとなり、之が病原となるとしたら、現代医学の治病方法自体が病氣を作る意味でしかない事にならう、右の如く万有の法則は靈が主で体が従である。としたら病氣は靈の曇りさえ解消すれば濁血は浄血と化し、全治するのは言う迄もない。それ

で我治病法は此原理の応用であるから、浄霊と曰って霊を
浄める事を目的とするものである以上、病気は根本的に治
る訳である。処が医学に於いては霊を無視し体のみを対象
として進歩して来たのであるから、結局一時的治病法でし
かない訳である。事実医療が根治的でない事は、偶々手術
等によって全治したようにみえるが成程元の病気は発らな
いとしても、他の病気が起るか又は再発するのは必ずと言
ひたい程である。例えば盲腸炎の如きも患部を剔出するの
で、盲腸炎は起り得ないが、盲腸に近接している腹膜炎や
腎臓病が起り易くなる。之は全く霊の方の曇りは依然とし

て残っているからで、而も藥毒も加はる為濁血は増へて、新たな曇りと合併し位置を変へて病原となるのである。

そうして濁血の変化であるが、濁血が不斷の浄化によつて一層濃度化するや、血粒に變化が起り、漸次白色化する、之が膿である。よく血膿と言つて膿と血液とが混合しているのは、之は變化の中途であつて、尚進むと全部膿化する、よく結核患者の喀痰が血液の混っているものと、そうでないものがあるのは右によるのである。又医学に於ける赤血球に対する白血球の食菌作用というのもそれである。